

前世処刑された令嬢は
過保護な王太子に甘やかされ中

第一章

（ああ、またこの夢……）

シンシアはその光景を高い位置から見下ろしている。
まるで物語の一幕を眺めるように。

場所はカビ臭くて薄暗い平民用の牢屋の中。女性が一人、虚ろな表情で座り込んでいる。
目を奪うような鮮やかな赤い髪を結い上げ豪華なドレスで美しく装っている姿なのは、夜会会場
からそのまま連行されたからだ。

不似合いな場所にいる、その憐れな姿に胸がツキンと痛む。

女性のいる鉄格子の内側には金髪に金色の瞳の美しい男性が立っている。男性は苛立たしげに顔
を歪め女性を睨んでいる。その身なりや佇まいはあきらかに高貴なんだ。

女性はベイトソン公爵家の娘マリオン、男性はマリオンの婚約者でこの国の王太子クリフトンだ。

——シンシアはこの後に何が起こるかを知っている。だつてマリオンはシンシアの前世だ。

彼女はこれから婚約者に毒を渡される。それを抵抗することなく飲み干してしまうのだ。

俯瞰ふかんして見ると、なんて可哀想な女なのかと思う。

クリフトンの婚約者としてすごしたのはたった一年。

それでも彼に相応しい婚約者になるために精一杯努力した。

シンシアの——マリオンの心に愛情は芽生えなかつたが、彼を尊敬していた。だからいつか愛情以外の感情……そう、たとえば友情や国を支える同士のような思いが生まれればいいと思っていた。でもそれはならなかつた。その証拠にマリオンは犯してもいらない罪で責められている。きちんとした調査もなく法に則るわけでもなく、彼の独断による断罪で牢にいる。

クリフトンは口を開くと強い口調で言葉を放つた。

「マリオン、不貞ふていはないと本当に断言できるのか？」

「私は不貞ふていなどしておりますません」

「マリオンが騎士と抱き合つていた姿を見たという証人がいる。それは事実ではないと？」

「誤解です。抱き合つていたのではなく、具合が悪く歩けなくなつたところを騎士様に助けていただいたのです」

「…………」

クリフトンの顔には疑心が浮かんだままだ。

信じようとしない相手に必死に弁明するのは空しい。段々と諦めが心に滲んでくる。

それでも認めるわけにはいかないと声を絞り出しマリオンは無実を訴える。

マリオンのエメラルドグリーンの瞳は堪えることのできない涙で揺らめいていた。

マリオンは夜会をこつそり抜け出して男性と逢引あいびしていたと噂をされていた。

そんな事実はないのにどうとう信じてもらえなかつた。

「マリオン。私をどう思つている？」

クリフトンは低い声で問いかける。

マリオンに向けられる視線は何かを見極めようとしているように感じた。

この質問は今までにも何度も何度も同じ答えを返す。

「殿下を尊敬しています」

これは本心だ。

王太子として驕むごることなく眞面目に公務をこなし、毅然ききやんと振る舞う姿は次期国王に相応しい。

だがマリオンの返事に納得できないのか、クリフトンは不満げに顔を曇らせ、はつと息を吐き落胆を露わにした。

それならマリオンは何を言えばよかつたの？
クリフトンはどんな言葉を求めていたの？

「そうか」

彼はスッと表情を消すと自らの手をマリオンに向けて差し出した。
彼の掌には黄色い小瓶が握られている。

「殿下……」

マリオンは呆然と呟いた。

彼女は瓶の中身を知っている。王太子妃教育で教えられた王家の秘毒。黒い小瓶は王族が自死をするために使う特別な物。苦しまずに眠りながら死ねる。

黒い小瓶でなかつたことに感謝するべきなのか。黒い小瓶は王族を侮辱した者に与えられる物で、長い時間苦しんで死んでいくという、報復を目的とした場合や重罰に用いられる毒だ。

疲れたわ——もう、いいわよね？

心の中でそう自分を許してあげることにした。

一度ゆっくりと目を閉じ、そして再び目を開いたときにはマリオンはすべてを諦めた。

そう、生きることを諦めてしまった。

「マリオン。これを飲め」

感情のない声で告げられたそれは実質的な死刑宣告——マリオンは顔を上げてもう一度クリフトンを見た。彼は冷ややかな眼差しを向けるだけだった。

マリオンは心の中で自嘲した。

彼の意志は固く同情や迷いは読み取れない。あるのは疑惑だけ。

これは死ななければならないほどの重い罪なの？

私はそれほどまでにクリフトンと信頼関係を築けていなかつた？

たどえ罪が晴れても自分はどうせ幸せになれない。それなら人生の幕を閉じよう。

決意が固まると手を伸ばし黄色い小瓶を受け取る。蓋を捻って外し中の液体を躊躇うことなく一気に煽つた。甘くところとした味が口内に広がり喉を通っていく。
(毒つて苦くて不味い物だと思っていたけれど、これは甘いのね)

「ふふふ」

毒の味の感想を思うことが可笑しくて自分を嗤つた。

薬は即効性だ。すぐに体の力が抜けふらりと仰向けに倒れる。教えられていた通り苦しくない。このまま死んでしまうなんて信じられないほどに。

マリオンの心は恐怖を感じず不思議なほど凧いでいた。
(とても……眠い……)

目を閉じるとある人の顔が瞼の裏に浮かんだ。その瞬間、無意識に口元が綻ぶ。

マリオンは穏やかな気持ちである人の幸せを祈った。マリオンはそのまま静かに息絶えた。

——シンシアは思う。マリオンのあつけない人生、その終幕はあまりに残酷だ。

マリオンは自分の気持ちを押し殺して王命でクリフトンとの婚約を受け入れた。そして苦しい妃教育をこなしてきたのにひとつも報われなかつた。

辛いことを我慢した結果がこれならば、逃げてしまえばよかつたのに。

クリフトンは表情を変えず言葉もなく、ただ冷たくなつていくマリオンを眺めている。

駆け寄ることも介抱することもない。動搖どうようもしなければ悲しそうでもない。
かといつて嬉しそうでもない。

クリフトンにとつてマリオンの存在とは何だったのか。
彼はこのとき何を考えていたのだろう。

——シンシアはそれをただ……じつと眺めていた。

シンシアが目を開けると自室のベッドの上だった。窓からはカーテンの隙間を縫つて朝日が差し込んでいる。体を起こしひどいボードにもたれかかった。気分はどうかく爽やかな朝だ。

「ふう。何度も見ても私の前世の最後つて悲惨ね」

夢で見たのはもう、何回目だろう？

一年くらい前から突然シンシアは前世の夢を見るようになった。最初は混乱したが今では慣れっこになってしまった。不定期に見るこの夢はいつも鮮明で、まるでたつた今日撃したかのように生々しく感じる。それなのにシンシアは驚くほど冷静で他人ごとだつた。

普通、これだけ悲惨な前世を思い出したらうなされて汗だくで起きて動搖どうようする。

そうならなかつたのは第三者として眺めていることで感情移入しなかつたのと、何度も見たことにより耐性ができたからだと思う。

そもそもマリオンとシンシアは完全に別人格として存在している。

あれは終わつたことで、思い出したからといって悩んでもどうにもならない。
だつて前世には戻れないし、戻りたいとも思わない。

シンシアにとつて前世の記憶よりも、昨日寝る前に読んだ小説の主人公の気持ちのほうがよほど共感できるものだし、引きずつている。

動物と少女が主人公の物語は感動の大作で、昨夜は号泣してしまつた。

正直なところなぜ何度も前世の夢を見るのかわからない。

もしかして神様からの何かのメッセージだつたりして？ どんな意味があるのかしら？
どうでもいいわ。それよりも今大切なことは――

「すっごくお腹空いた～」

手でお腹をさすりながら呑氣な声を出す。

まずは朝食を！

シンシアは侍女を呼び着替えながら前世を回想した。



シンシアの前世であるマリオンはクラム王国王太子クリフトンの婚約者で、ベイトソン公爵家の娘だった。ベイトソン公爵家の親子関係は冷え切つていた。両親は政略結婚だつたせいかマリオンにまったく関心がない。

いや、政治の駒として利用価値があると思っていたのかもしれない。娘が王太子妃になれば公爵家の権勢が華やぐ。

でもそれだけで、親から娘に与えられる類の愛情を感じたことは一度もない。ただひたすらに、公爵家を継ぐ娘として恥ずかしくないように教育されてきた。

そう、マリオンはもともと公爵家を継ぐはずだったのに突然変更になつた。

——王命で王太子クリフトンの婚約者に決まつてしまつたのだ。

もちろん王命なので断ることはできない。その日から公爵家を継ぐための教育より遙かに厳しい王太子妃教育を受け、クリフトンに相応しくあるための努力をしてきた。

内気なマリオンは心の内を隠して、自己主張をせず従順だつた。

クリフトンは頭も良く見目も華やかで優しく、お手本のような王子様だつた。公務もそつなくこなしていた。足を引つ張るわけにはいかないというプレッシャーはいつもあつたと思う。

政略で決まつた婚約ゆえに二人の間には恋という甘い感情は芽生えなかつたが、マリオンは彼を尊敬していた。

自分なりに寄り添つたつもりだ。一緒にすごす中で信頼関係を築けていたと思つていた。それなのに彼は不貞の噂を鵜呑みにして、マリオンをかけらも信じず切り捨てた。

——どうしてこんなことになつてしまつたのか。

ベイツン公爵家の正当な血筋を持つ子供はマリオンだけ。

父を嫌う母が二人目を産むことを強く拒否したからだ。

二人とも愛人との間にそれぞれ子供がいて、父は愛人との間にできた子に家を継がせたいと思っているが当然母が許さない。お互いの考えを主張し何年も揉めていたが、マリオンが十五歳になるといい加減跡継ぎを決めなくてはならないと父が折れた。

そして、親戚筋からマリオンの婚約者を選び、婿入りしてもらうことが決まつた。

婚約者となる人が公爵家の屋敷に来たのは、マリオンが社交界デビューする一年前のこと。

婚約者となる人——彼はエッジ伯爵家の四男で名をコンラッドという。

マリオンより五歳年上で、長身で逞しい体を持ち威圧感のある男性だつた。

聞けば騎士として働いていたが今回の縁組をきっかけに騎士を辞めることになつたという。騎士だつたことを知り、その体格の良さに納得した。

でも公爵家の都合で彼の将来を変えてしまうことになり申し訳なく思つた。領地経営などを一緒に学ぶ必要があるため、騎士のままでいいられなかつたのだ。

ベイツン公爵家とエッジ伯爵家は、親戚関係ではあるが縁は薄く、親交がなかつたので彼がどんな人なのかマリオンは知らない。

初めて会つた時の印象は『怖い』だつた。彼の纏う空気は重々しいし、表情は険しく不機嫌そう

に見えた。ダークブラウンの髪と同じ色の瞳は鋭く意志が強そうで威圧感がある。

もしかしたら婚約を迷惑に感じているのかもしれない。

誰もが高位貴族の婿に選ばれて喜ぶとは限らない。

「初めましてマリオン様。コンラッドと申します。あなたとベイトソン公爵家のために尽力します。よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします」

コンラッドの挨拶の言葉は端的で堅苦しく儀礼的だった。マリオンはすっかり委縮し、コンラッドに苦手意識を抱いてしまった。

その後、彼は与えられた教育をこなすのに必死で余裕がなさそうだった。

マリオンから話しかけて労わなければと思うのに、上手く話しかけられず途方に暮れてしまう。コンラッドも自分から女性に気安く話しかけるタイプではなかつた。

マリオンの社交界デビュー後に正式に婚約を結ぶことになつていて、二人の距離は縮まらない。今のマリオンにできることはコンラッドの負担を減らすためにいつそう勉強に励むことだつた。これといった交流が進まないまま一ヶ月がすぎた頃、意外なことにコンラッドが声をかけてきた。お茶に誘われたのだ。

気まずげに始まつたお茶の時間は沈黙が多かつたが、コンラッドが意を決したように口を開く。「マリオン様。これをどうぞ」

「まあ。ありがとうございます」

口を引き結びながら彼がマリオンに差し出したのは、可愛くラッピングされたピンク色の小さな箱だつた。

「開けてもいいですか？」

「はい」

ぶっきらぼうな返事にしゅんと眉を下げながらも箱を開ければ、中にはガラスでできたうさぎの置物がちょこんと入つていた。

「まあ、かわいい！ コンラッド様が選んでくださつたのですか？」

思いがけないプレゼントが嬉しくて、それを胸に抱きしめ彼を見上げた。

「ええ。気に入つて頂けたならよかつた」

言葉とは真逆のニコリともしない表情と平坦な低い声に、喜びがみるみる萎み申し訳なさでいっぱいになつた。マリオンに氣を遣つてくれたのだろう。

そういえば彼はこの婚約をどう思つているのか確かめたことがなかつた。

もしさう女性がいたのならマリオンはそれを邪魔したことになる。

「コンラッド様には気を遣わせてしまい申し訳ございません。この婚約は公爵家の都合によるものです。コンラッド様にはきっとご迷惑だつたのでしょうか……」

マリオンの謝罪の言葉にコンラッドは驚いたように目を丸くした。

すぐに否定するように首を振る。

「迷惑などではない。むしろありがたい話だ。ああ、私の態度が悪くてマリオン様にそう思わせて

しまったようだ。すまない。その、私はずっと騎士団にいたので女性に対して不慣れだ。気が利かない自覚はあるのだが……せめて何か贈り物をと思って……」

必死に弁解しようとする言葉に彼が歩み寄ろうとしてくれていたことを知る。

もしかしたらマリオンと同じで、人と距離を縮めるのが得意じゃないのかもしれない。勝手に嫌われていると思い込んでいたが、話もせずに決めつけたことを反省した。

「そう思つてくださつたこと、とても嬉しいです。あの、コンラッド様に聞いておきたいことがありますですが、いいでしようか？」

「ああ、何でも聞いてくれ。私たちはまず話をするところから始めなくてはならないな」

確かにそうだ。マリオンは頷いた。

「コンラッド様には想う女性はいらっしゃらなかつたのでしょうか？ もしその女性との仲を裂いてしまつたことになつていたのなら……」

それでも両親が決めた婚約者であり、家の柵があるのでマリオンには婚約をなかつたことにはできない。聞いても仕方がないとはいえ、いずれマリオンの両親のように跡継ぎが生まれたら愛人を廻うかもしない。

その覚悟をしておきたかった。

「いや、いない。このとおり愛想がないので女性には敬遠されていた」

「そうなのですね」

マリオンはホッと安堵の息を吐く。

「あの……マリオン様にも想う相手は……いなかつたのだろうか？」

言い淀むような問いかけにマリオンは目をぱちくりとした。

「私に、ですか？ いません。あの、男性の友人もいないので」

「そうか、それならお互いに問題ないな。よかつた。私は、その……できればマリオン様と信頼関係を築いていきたいと思っている」

コンラッドが少し視線をざらし目元を赤くした。

照れているのかもしれない。それに気付くと微笑ましくなり思わず口元が締んだ。

これが彼の本心なら自分と同じ不器用な人なのだ。

でも精一杯歩み寄つてくれている、それなら自分も頑張ろう。

「私もです。私もコンラッド様と信頼し合える夫婦になりたいです」

同じ気持ちだと伝えたかったのだが、自分の言葉にマリオンは顔を赤くした。『夫婦』と言つたのは先走りすぎたように思う。ちらりとコンラッドを見ると彼も気恥ずかしそうな顔をしていた。

その日から食事は一緒に摂ることを約束した。

一人で摂る食事と違い、二人での食事には会話がある。内容は勉強の進捗だつたり、コンラッドが騎士団にいたときの様子などだつたりした。

いつもの静まり返つた食堂にコンラッドの大きな声が響いて賑やかになる。食事が美味しいとなんて楽しいのかしら！

前世処刑された令嬢は過保護な王太子に甘やかされ中

思つたのは初めてだつた。

屋敷内でも慣れるためにと彼がエスコートをしてくれる。

背の高いコンラッドの腕に手を添えるのは少々大変だが、段々慣れていた。会話も緊張しない。打ち解けてきた頃合いを見て、どちらかともなくお互い名前を呼び捨てにしようと決めた。

その方が早く心の距離が近くなるからと。

コンラッドの口調はぶっきらぼうだがマリオンに気を配つてくれていることがわかる。彼はとても優しい人だ。マリオンはすっかり彼に心を許せるようになつた。

ある日二人で休憩をしているとき、コンラッドが眉間に皺をよせ強い口調で言つた。

「マリオン。あなたは頑張りすぎだ。そんなに一人で頑張らないでくれ。私はあなたを支えるためにここにいる。とはいえたま足を引っ張つてしまつてゐるが、すぐに追いついてみせる。だからこれからは一緒にやつていこう」

「えっ？」

一見不機嫌そうで怒つてゐるように見えるが、そうではないと知つてゐる。

これは心配してくれてゐるのだ。

マリオンには一人で頑張つてゐるという意識はない。

ただ、幼い頃から家を継ぎ女公爵になるのだという意識は強かつた。マリオンにとつてそれは、決められた将来であり、たつた一つの存在意義だったから。

その気負いが無理をしているように映るのかかもしれない。

でもマリオンは子供の頃から家庭教師にこう言われてきた。

「公爵家を継ぐことの意味を理解し、すべてをこなせるようになりなさい」

「悔られないように完璧でいなさい」

「血を吐くほど努力をしてもまだ足りません。もつと精進なさい」と。

そう告げると、コンラッドは悲しそうな表情で首を横に振つた。

「それは厳しすぎる。マリオンはよくやつてゐる。まだ十五歳だろう。いますぐ完璧になる必要はないと思う。それに使用人たちがあなたをとても心配している。それに気付いているかい？」

「心配？」

首を傾げ、心当たりを探す。

そういえば侍女が休憩を何度も勧めていたが、区切りが悪いと言い訳をして休んでいなかつた。彼女は寝る前にはリラックス効果のあるお茶を用意してくれていた。

体調が良くなきときには何も言わなくて胃に優しい料理が出てくる。

部屋にはマリオンの好きな花がいつも活けてある。

それを当然のように感じていたが、みんなマリオンのためにしてくれていたのだ。

コンラッドの言葉で自分の余裕のなさと視野の狭さに気が付き、愕然とした。いずれ公爵家の主になるのだと意気込んでおきながら、周りがまったく見えていない。それでは駄目だ。
俯き両手を膝の上で握りしめながら自分の至らなさを責める。

「気付かなかつたわ。ごめんなさい」

するとマリオンの手を大きく硬い手が優しく包み込んだ。

それは温かくて、まるで心ごと抱きしめられているようを感じた。

思わず顔を上げるとコンラッドが柔らかく微笑んだ。

初めて見る微笑みに胸がトクンと鳴る。

「反省するのはマリオンらしいが……そこは素直に感謝すればいい。ありがと伝えれば、みんなきっと喜ぶ。それに責めているわけじゃない。もつと自分を大切にしてほしいだけだ。いいね？」

「はい……」

嬉しくて、とても嬉しくて涙が零れそうだった。

両親が自分に関心がないことで、まるでこの世界にマリオンを心配してくれる人はいないような気持ちになっていた。でもそれは自己憐憫に浸っているだけだ。

コンラッドが側にいてくれるようになつてマリオンの世界は広がつた。

使用者たちの温かさを知ることができた。

自分は孤独じやなかつた。たくさんの味方がいる。

マリオンはもう寂しいとは思わない。何よりもコンラッドがいてくれる。

——マリオンはこの日から、切羽詰まつた思いから解放され穏やかな気持ちで日々をすごせるよ

うになつた。

使用人に「ありがと」と伝えればみんな嬉しそうに微笑んでくれる。コンラッドのおかげだ。彼が婚約者で本当によかつた。それだけは心から両親に感謝した。

あまりに幸せすぎて怖くなつてしまふほど。でもそれは杞憂だ。あともう少し、マリオンが社交界デビューしたらコンラッドと正式に婚約し一年後には結婚する。

その日が待ち遠しい。自分が何かを楽しみにできる日が来るなんてびっくりだ。

私は、きっと幸せになれる。

最近のコンラッドはよく笑うようになった。厳めしい顔なのに笑顔はどこか可愛い。その笑顔が見られるとご褒美(ほめい)をもらえた気持ちになる。

一人でいるとき、マリオンはコンラッドをこつそり觀察した。

そしてわかつたのは見かけによらず甘い物が好き。だけど豆が苦手で食べるときは眉をぎゅつと寄せる。でも残さないのはえらい。考えごとをしていると人差し指を机に五回トントンするのが癖。そんなふうに彼を知るのは楽しかった。

マリオンは十六歳になるとコンラッドのエスコートで社交界デビューをした。

彼と選んだデザインのドレスはお気に入りの一着。コンラッドは顔を真つ赤にして「似合つている」と言つてくれた。きっと同じくらい自分の顔も赤くなつていて。

二人で沢山練習したダンスは緊張しながらでも上々のできだつた。彼が側にいてくれるだけで心

に余裕ができて、貴族たちとの会話も緊張せずにすんだ。
マリオンの人生の中で最高に幸せな一日だった。

——その夜、夢を見た。

コンラッドに似た小さな男の子を真ん中にしてコンラッドと自分が手を繋いでいる。公園をゆっくりと笑いながら歩く。

多幸感に包まれながら「ああ、これは夢だ」と気付いた。その瞬間に目が覚めた。

頬に触ると濡れている。マリオンは指で涙を拭うとくすりと笑った。

これは悲しくて泣いたのではない。心の中でずっと憧れていた光景を、叶う前に一足先に夢で見ることができて嬉しかったのだ。素敵な夢がもうすぐ現実になる。

窓を見ればまだ薄暗いのでもう少し睡ることにした。

目を閉じたけれど、あの幸せな夢の先を想像してしまい、なかなか寝付けなかつた。

社交界デビュ－を終えるとすぐに婚約の書類を提出するはずだったのに、なぜか父が待つたをかけた。大丈夫だと思いつつも心の中に不安が滲みだす。

コンラッドも困惑しているのがわかる。あえて一人ともそのことは話題にしなかつた。

それから一ヶ月後、コンラッドと一緒に父の執務室に呼ばれた。

ようやく婚約が結ばれたのだと、安堵しながら一人で目を見合わせ微笑んだ。

部屋に入ると意外なことに母もいた。いつも母は愛人と住む別邸に入り浸つており、本邸には必要最低限しかこない。この二人が一緒にいるのは珍しい。

しかもやけに浮かれている様子に、嫌な予感がした。

「お前たちの婚約は白紙になつた。マリオン、喜べ。お前は王太子殿下の婚約者となつたのだ！」

「よかつたわね、マリオン。私の産んだ娘が王太子妃になるなんて素晴らしいわ！　榮誉なことよ。喜びなさい」

「えっ!?」

「えっ!?」

「幸いお前たちの婚約は仮で正式なものではなかつた。書類も出していなかつたし、本當によかつた。デビューのエスコートは親戚だから問題にはならないだろう。ただいつまでもコンラッドが屋敷にいると穿つた見方をする人間もいる。早々に出て行つてもらいたい。エッジ伯爵には説明して承を得てある。それに詫びとしてかなりの金を渡してある。いいな」

マリオンは頭の中が真つ白になつた。顔色も悪いはず。

コンラッドを見れば彼も呆然としていた。二人とも黙つたままだつた。

「どうして？」「いやよ」「王太子妃になんかなりたくない」「コンラッドと結婚したいの」

マリオンは心の中で叫んだ。

でも両親に対し従順に生きてきたマリオンには、それを口に出すことができなかつた。

愛されていなくても、それでも見捨てられなくなかった。

——幸せはこの手に掴む寸前で泡のようになってしまった。一人で生きる未来はこうして終わってしまった。

父はすぐにコンラッドを追い出してしまったので、マリオンはお礼もお別れの挨拶もできなかつた。

マリオンは悄然としたままごし、夜になると侍女に促されて食事のために食堂に向かう。大きなテーブルには一人分のカトラリーが並んでいる。いつもは向かいにコンラッドの分もあつた。席に着くと給仕がスープを皿に注ぐ。スプーンを手に取り口に運ぶが味がない。

コンラッドがいない。彼の話声が聞こえない。

ふいに喉が詰まり鼻の奥がつんとした。

「つ……」

涙が頬を滑り落ちていく。テーブルにボタボタと染みができる。寂しい。コンラッドはもうここにいない。二度と戻つてこない。

「今日は……食べられそうにないわ……」

スプーンをテーブルに戻すと席を立つ。

「お嬢様……」

侍女は心配そうにしていたがマリオンはそのまま部屋に戻つた。ベッドに横になり枕に顔をぎゅっと押し付ける。

「コンラッド。あなたが好き……好きなのに……」

彼に好意を抱いているとわかつていたが、明確に自覚すると恥ずかしくなつてしまいそうで自分の気持ちに正面から向き合わなかつた。

言葉にして想いを告げたことはない。

でもコンラッドならわかつてくれると思つていたし、結婚してから伝えようと思つていた。

だつてずっと一緒にいられるはずだつたから。

それなのにもう会えない。もう伝えられない。コンラッドが好き。彼と一緒にいたかつた。せめて伝えておけばよかつた。マリオンの心に後悔が押し寄せる。

コンラッドが誉めてくれたから自分に自信が持てるようになつた。

彼が側にいてくれるから寂しくなくなつた。

生きるのが楽しい、幸せだと知ることができた。

何よりも自分を必要してくれる人、そして自分にとつて大切な人に出会えたと思つたのに……マリオンは実るはずだつた初恋を失つた。

王太子クリフトンはマリオンより二歳年上で、婚約者候補が二人いた。

一人はブラックストン公爵令嬢エレン、もう一人はブリュード伯爵令嬢ライラ。

ライラの母親と王妃様が親友同士であることからライラが有力だと思われていたが、爵位の低さから多くの貴族から反対の声が上がっていた。身分を踏まえエレンに内定していたはずだったのに、どうして突然マリオンに決まつてしまつたのか。

高位貴族の結婚は親が決める。マリオンの意志で断ることは不可能だ。

しかもこれは王命。

もちろん伯爵子息でしかないコンラッドにだつてどうすることもできない。

そうわかついても、心が受け入れることを拒否していた。

後日知つたのは、エレンが隣国の王太子殿下に見初められ婚約の打診があり、それが正式に決まつたということ。そのためクリフトンの新たな婚約者候補が必要になつたのだ。

王妃様は再びライラを推したそ�だが陛下が難色を示し、結果年齢と爵位しゃくいを考慮こうりょしマリオンに決まつた。それも候補ではなく正式な婚約者に。

父は愛人に産ませた子にベイトソン公爵家を継がせることに決めた。

母は不満に思つてはいたようだが、公爵家の血を残すためには仕方がない。自分が産んだ子であるマリオンが王太子妃になることで納得した。

「どうして……神様はひどい……幸せを夢見させて……手が届きそうになつた直前に取り上げるなんて……」

貴族の娘の義務だと理解していくも心は追いつかなかつた。

それに王太子殿下の婚約者になるということは、ゆくゆく王妃になるということ。

それはマリオンの器ではないし、自信がない。
社交界を束ね、クリフトンと国を導く未来を想像できない。
——でも現実は無情だつた。

マリオンは悲しみに浸る暇もなく、結婚式までの期間が短いからと、クリフトンとの顔合わせもしないうちから、早々に王太子妃教育のスケジュールをこなすことになつた。

公爵家を継ぐ勉強とは比にならないほどの大変さに毎日くたくたになる。受け入れきれない現実を悲しんでいる余裕すらなくなつたのはむしろ救いかもしれない。

一ヶ月が経ち、正式にクリフトンとの顔合わせの日が決まつた。彼はずっと公務で地方に行つていて不在だったので延期になつていたのだ。

マリオンはクリフトンと話をしたことはない。評判はいいが実際はどんな人なのか、上手くやつていけるのか、不安で眠れず胃もきゅつと痛む。

顔合わせの前日、コンラッドから手紙が届いた。侍女が父に内緒で渡してくれた。どうやら取り次がないように指示されていたらしい。

侍女にお礼を言うと部屋に入り、深呼吸をして手紙を開いた。

『マリオンなら大丈夫、自信を持つて。あなたの幸せを祈っています』

コンラッドは知つてゐる。マリオンが不安に押し潰されそうになつてゐることを。幸せ？あなたがいなゐのに幸せになんてなれない。

王太子妃教育で心が麻痺してゐたが、コンラッドを思い出し悲しさが再燃する。

手紙を胸に抱きしめ声を押し殺しながら涙を流した。しばらくして泣き止むと、マリオンはそれを鍵のかかるオルゴールの中に隠すようにしました。

——所詮、私と殿下の婚約は、貴族内のバランスを取るための戦略的なもの。

クリフトンもきっと仕方なく受け入れたのだろう。彼は幼馴染のライラを愛しているという噂だ。それを知り、最初の顔合わせでマリオンは酷く緊張した。冷ややかな態度を取られると思ったのだ。それはそうだろう。ようやく本当に好きな相手と婚約できそつたのに、別の女になつてしまつたのだ。

ところがクリフトンはマリオンに対し穏やかな微笑みを向けた。

マリオンの顔は強張つたままだが、少しだけ緊張が解けた。

「マリオン。これからよろしく頼む」

「はい。こちらこそ、至らぬ身ではあります精一杯務めさせていただきます」

クリフトンは鷹揚に頷いた。

交流を重ねていくが、彼はひたすらに優しく傲慢な態度を取ることはなかつた。

婚約者だから当然だと、たくさんのアクセサリーやドレスを贈られた。豪華で高価な品々に気後れしてしまうことはあつたが、クリフトンは模範的な婚約者だつた。

だからマリオンは、クリフトンに真摯に向かい合おうと決めた。

彼も愛する人と結ばれるのを諦めてマリオンと向き合つてくれている。

勝手に同志のような気持ちになつていていた。

(彼の役に立てるよう頑張らなくては)

ただ王太子妃教育は厳しく、教師たちは叱責を繰り返した。

もともと自尊心が低く内気で自分に自信がなかつたマリオンの心はボロボロになつた。コンラッドが与えてくれた自信をすつかりと失くしてしまつた。

(コンラッド。あなたは大丈夫だと言つてくれたけれど、控えそうだわ……)

クリフトンはマリオンが社交場でミスをしてフォローをし、優しくアドバイスをしてくれた。すごくありがたいと思う。それなのにマリオンはどうしても心を開くことができない。

本心では、王太子妃という立場からも、クリフトンからも逃げてしまつたかった。

妃教育の後の二人ですごすお茶の時間、クリフトンはきまつて「マリオンはよくやつてゐる」と勞つてくれた。

その言葉を聞いて後ろめたく思うのはどうして？

頭の中に一瞬コンラッドの顔が浮かんで消える。マリオンはそれを誤魔化すように微笑んだ。「殿下。まだ時間は大丈夫ですか？ 次の公務が迫つてゐるのでは……私のために時間を使いすぎ

ては侍従たちに怒られます」

クリフトンのスケジュールは過密だ。いつだって次の公務の予定がある。これ以上気を遣わせるわけにはいかない。

それに先日、王妃様にクリフトンの足手まといになるなど厳しく叱責しつせきされたばかりだ。

「大丈夫だ。侍従も婚約者とすぐす僅かな時間を、邪魔するような無粋な真似はしないだろう。気にしなくていい」

「……はい。ありがとうございます」

クリフトンには感謝している。彼にとつて不本意な婚約であるのに、それをおくびにも出さずに優しくしてくれる。正直なところコンラッドと同じ想いを抱くことはできないが、王族でありながら身分を笠かさに着ない姿を尊敬していた。

彼と結婚することは覆らない。それならば良好な関係を築きたい。

それなのに――

気付けば二人の間には大きな溝ができていた。きつかけはわからない。

ある日を境に、クリフトンのマリオンに対する態度は冷淡なものになつた。

なぜ？ クリフトンはいつの間にかマリオンを見ると不機嫌ふきげんそうに目を細める。

それでも夜会のエスコートはしてくれるし二人きりのお茶会をほこ反故にされたことはない。婚約者としての義務を疎かにはしないが、その態度は冷ややかだ。

一人でいる時間は針の筵はり むしろで息苦しい。むしろ義務を放棄してほしいと思うようになつた。

耐えられなくなり、どうどうマリオンは訊ねた。

「殿下。私が何か失礼をしてしまったのでしょうか？ 直します。どうか教えてくださいませ」

「マリオン。理由に心当たりはないのか？」

「はい。申し訳ございません」

「これは自分で考えなさい」

「……」

クリフトンははねつけた。マリオンは諦めて時間が解決してくれることを祈つた。

夜会でクリフトンはファーストダンスを踊るとすぐに、マリオンを置いてどこかに行つてしまつ。

マリオンは壁の花になつた。周りの貴族はクリフトンがマリオンを疎ましく思つていると察して話しかけてこない。令嬢たちは見下すようにくすくすと笑う。

辛い……何もかも捨てて逃げてしまいたいと何度も思つた。
ぼんやりと俯うつむいていると声をかけられた。

「ベイトソン公爵令嬢。あちらに綺麗な花が咲いていました。夜に咲く花です。月明かりに照らされて幻想的ですよ。よかつたら一緒に見に行きませんか？」

マリオンは眉を顰めた。たとえ疎まれていても自分は王太子の婚約者だ。ダンスに誘うなら理解できるが夜会会場を抜け出して庭に誘うなど非常識だ。

「申し訳ございませんが、不要な誤解を招くようなお誘いはお控えくださいませ」

はつきりと拒絶の意を伝えたが、その男性はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた。マリオンは記憶を辿つたが彼がどこの家の者なのか心当たりがない。きっと嫡男ではない子息だろう。

「王太子殿下はあなたのこと放っていますよ。だから大丈夫です。それに一緒に来ればきっと楽しい体験ができますよ」

その言葉にゾッとした。粘着質な眼差しに鳥肌が立つ。

もしもこの男性とのことが噂になれば間違いなく醜聞になる。ベイトソン公爵家もマリオンも立場を失う。それにコンラッドに知られたら……彼に軽率な女だと誤解されたくない。

怯えているだけでは駄目だ。

誰かの助けを期待できないのなら、自分で自分を守らなくてはならない。

「……お断りします」

すぐさまその場を離れようとしたが、すかさず腕を掴まれた。

「放してください！」

「マリオン様。お静かに。騒げば私はあなたに誘われたと殿下に言いつけますよ？」

「そ、そんな」

周りを見渡したがみんながそれぞれ自分の社交に夢中で、マリオンを気にかける者はいない。王太子の婚約者に対する扱いではないが、クリフトンがマリオンを蔑ろにしているので貴族たちが同調している。

そしてマリオン自身が、蔑まれる視線が辛いと人混みから遠ざかつたのがあとなつた。会場の

隅で隠れるようにすごしたのは失敗だ。堂々としているべきだつた。

マリオンは男性に掴まれた腕を振りほどこうとしたが敵わない。強引に腕を引っ張られ庭の方へと引きずられていく。

「いや、放して。誰か助けて」

恐怖に耐えられず夢中で声をあげた。でも誰も気づいてくれない。

「誰も来ませんよ。せつかくだから楽しみましょう?」

男は下卑びた笑みを浮かべた。

マリオンの目には恐怖と悔しさで涙が浮かんでくる。足を踏ん張つても抵抗にすらならない。

（怖い。お願い。誰か気付いて。誰か助けて）

そのとき――

「ベイトソン公爵令嬢様。どうされましたか？」

夜会の警備の騎士がマリオンの様子に気付いて声をかけてくれた。

この声は……懐かしい人の声。

やはり顔を見ればコンラッドだつた。思わず縋るように彼に手を伸ばした。

「たすけて……」

男性はすかさずマリオンを背に隠しコンラッドから遠ざけようとした。

「何でもない。マリオン様が体調を崩されたので静かな場所へ案内するところだ。騎士風情が余計な口出しをするな」

男は威圧するように言つたがコンラッドは冷静だつた。

引き下がらず目に細めると低い声で告げる。

「あなたはコンロン侯爵子息ケイシー様ですね？ 先日アルダン子爵夫人との密会が見つかり御夫君と立ち回りがあつたと記憶しています。いいのですか？ このことを侯爵様が知つたらどうなるでしょうね？」 四男のあなたは嫡子のスペアですらない。侯爵様が何度も助けてくれるでしょうか？」

彼は侯爵子息だつたのか。さつきからの強気な言葉は身分ゆえ。何かあつても父親がもみ消すと思つてゐるのだろう。

「父上に告げ口する気か？ 卑怯な……」

コンラッドはふつと片方の口角を上げた。

「お前ほどではない。王太子殿下の婚約者に手を出したとなれば侯爵様も庇えまい。家がどうなるか、自分がどうなるか想像したらどうだ？」

「……どうせ殿下に見捨てられているくせに！」

侯爵子息はマリオンに捨て台詞を吐くと忌々しそうに舌打ちをする。マリオンの手を乱暴に放すと足早に去つて行つた。

「助かつた……ありがとうございます」

気が抜けて足の力が入らずへなへなどその場に座り込んでしまつた。

「大丈夫ですか？ 王太子殿下のところまでお送りしましょう」

嫌だ。クリフトンのところには戻りたくない。

「いいえ、殿下のところではなく馬車止めに連れて行つてくれますか？ 屋敷に帰ります」

「ですが……」

「お願いします」

「わかりました」

コンラッドはマリオンをそつと抱き上げた。遠慮するべきだと思ったが、気持ちが折れて歩けそうにない。だから甘えてしまつた。

（今だけ……今だけだから）

このままクリフトンのもとに戻つても鬱陶うつとうしがられる。もしくは誤解をされて、ふしだらだと叱しっ責さきされるかもしれない。

それならばもう帰りたい。ファーストダンスも踊り最低限の義務は果たした。

これ以上会場にいてもマリオンは役に立たないのだから。

コンラッドの腕の中は温かくて安心できる。抱きかかえる腕はマリオンを守るように力強い。

コンラッドと一緒にすごした一年間、体温を感じるほど近くで触れ合つたことはなかつたが、懐かしい匂いに包まれてホッとした。本当はずつとこのままコンラッドといたい。

（もしも、このまま一人で逃げることができたら……）

コンラッドの顔を見たら、耐えられずに涙がこぼれた。

「うつ……」

するとおろおろとした声が聞こえてきた。

「マリオン。大丈夫か？ いや大丈夫ではないな。怖い思いをしたのだから。でももう大丈夫だ。あとマリオン……すまない。私はハンカチを持っていない。だから泣かないでくれ」

「ハンカチ……」

以前の話し方に戻つたことが嬉しい。

そしてぶつきらぼうだけれど心の底から心配してくれてているのは、その声からわかる。

何よりもハンカチを持っていないのがコンラッドらしくて、涙が引つ込んで笑いそうになつた。マリオンは自分の指で頬の涙をそつと拭つた。

「大丈夫よ。ありがとう」

馬車止めでおろしてもらうとコンラッドの顔を見上げた。

どこか切なそうな表情にマリオンの心は苦しくなつた。

「ベイトソン公爵令嬢様。どうぞお気をつけて」

それはお互いの立場を思い出させる言葉だった。

マリオンは公爵令嬢で王太子の婚約者、コンラッドは爵位を持たないただの騎士。

数か月前までは私たちは婚約者同然だったのに、まるでその事実がなかつたことになつてゐる。

それが酷く悲しい。

マリオンは一度目を閉じ、そして淑女の仮面を着けて微笑んだ。

「騎士様。助けてください本当にありがとうございました」

コンラッドは頭を下げマリオンの乗る馬車を見送つた。

これが私たちの距離。もう気安く話することはできない。マリオンは馬車の中で静かに涙を流した。そして自分の恋心を再び心の奥底にそつとしまい、鍵をかけた。

屋敷に戻るとオルゴールを開け、コンラッドからもらった手紙を取り出した。彼らしい豪快な文字をそつと指でなぞる。それは自分を慰める儀式だった。

それから数日後、マリオンが不貞を働いているという噂が流れ始めた。

夜会でクリフトンの目を盗み男性と密会していたという目撃証言まで出た。

噂を流したのはコンロン侯爵子息だつた。先日の腹いせだ。

歩けなくなつたマリオンをコンラッドが抱きかかえて運んでいたところを見た人間がいたことで、余計に噂が大きくなつた。抱き合つて口付けを交わしていたと誇張されている。コンロン侯爵子息は調子に乗り、それを触れ回つてゐる。

マリオンは不貞なんてしていない。問われれば弁明できるが、誰にも直接訊かれたことはない。もちろんクリフトンは噂を知つてゐるはずだ。それなのに問い合わせない。

今の二人の関係を思えば信じてもらえないだろう。

だからといって疚しいことはないのに、自分から言い訳をしたくない。

——数日後、クリフトンは噂ではなく別のことを探してゐた。

「……マリオン。私をどう思つてゐる？」

「一体なぜそんなことを聞くのか不思議に思つたが、クリフトンはじつと答えを待つてゐる。
「もちろん尊敬してゐます」

マリオンは本心を告げたが、クリフトンは不満げに顔を曇らせた。
でもこれ以外の返事は思い浮かばない。何を言えばいいの？

機嫌を取るために媚びるような嘘も吐けない。

翌日、クリフトンは夜会が終わるなりマリオンを別室に連れて行つた。そこにはなぜかライラがいる。ピンク色の垂れ目の瞳が潤み、マリオンに対し敵意をあらわに睨んでいた。

「マリオン。ライラがこの手紙を拾つた。お前が書いたもので間違いないか？」

心当たりはないが確かめるために、それを受け取り広げて確認する。

サッと目を通すと唇をぎゅっと噛んだ。その内容はマリオンが男性に愛を囁くものだ。文字はマリオンの字によく似せられていたが、マリオンが書いたものではない。

クリフトンはこれをマリオンの浮気の証拠だと突きつけた。

「これは私が書いたものではありません。文字は似せてありますが、違います」

「見苦しいぞ。ひつきをかんい筆跡鑑定ひしきかんていもしてある」

「そんな……」

本当に鑑定をしたのだろうか。よく見れば細かいところが違う。素人はともかく専門家なら見分けられるはずなのに。

「殿下。鑑定結果は何かの間違いです！ お願いします。もう一度詳しく調査をしてください」

きちんと調べればこれが偽造だとすぐにわかる。マリオンの無実は証明されるはずだった。

それなのにクリフトンは必要ないと突っぱねた。

「マリオン様。本当のことを言ってくださいませ。夜会のときに騎士と抱き合つていたという目撃者もいるのです。認めればクリフトン様もわかつてくれます。それで婚約を破棄すればいいのですもの」

ライラは諭すように優しく言うが、認めるわけにはいかない。

「それは誤解です。抱き合つていたのではなく、具合が悪くて歩けない私を騎士様が支えてくださつただけです」

嘘の噂を認めて婚約を破棄されることは別にいい。自分はどうなつてもいいが、不貞を認めてしまふと一緒にいたコンラッドも処断されてしまう。絶対に彼を巻き込みたくない。

「本ですか？ 二人は見つめ合つて口付けをしていたと――」

「ライラ、もういい!! マリオンを牢へ！」

クリフトンは騎士に命じマリオンを牢屋へ放り込んだ。

貴族用ではなく平民の罪人が入る場所だった。じめじめしててカビ臭い。マリオンは膝を抱え

恐怖に体を震わせながら、そこで一晩すごした。

「殿下は……どうして私を信じてくださらぬの？」

少しづつではあるが信頼関係を築けていたと思ったのはマリオンのひとり善がりだつたのか。

カビ臭い暗い牢の中で眠れるはずもなく「なぜ、どうして」と自問自答を繰り返す。

コンラッドへの想いを閉じ込めて、彼の婚約者として必死にやつてきたのが無駄に思えた。

一睡もできないまま朝になる。

両親はマリオンを見捨てたのだろう。そうでなければ抗議をして屋敷に連れ帰つてくれるはずだ。
それが無理でも貴族用の牢に移動できたはず。

マリオンの心は折れてしまつた。

コンラッドを失い、両親に見限られ、クリフトンには憎まれている。
「もう、疲れた……」

夕方になると牢にクリフトンが現れ、蔑むような眼差しを向けられた。
そして再び昨日と同じ質問をされた。

「マリオン、不貞はないと断言できるのか？」

「不貞などしておりません」

疚しいことなど何もなかつた。

コンラッドは助けてくれただけ。マリオンは彼の名前すら呼んでいないのに。

「……マリオン。私をどう思つてている？」

クリフトンは何かを見極めようとするようにじつと自分の表情を見ている。

またこの質問……彼の意図がわからない。マリオンにとつて答えはひとつしかない。
「殿下を尊敬しています」

「そうか」

彼はゆるく首を振るとスッと表情を消した。

そして腕をマリオンに向かつて差し出す。彼の掌には小瓶が握られている。
マリオンは目を見開くとそれをじつと見た。信じられなかつた。

王太子妃教育で習つた王家の秘毒……黄色い小瓶。万が一のときの自害用の物。優しかつたクリ
フトンが不貞の噂だけでここまでマリオンを追い詰めるのか。

最悪の場合、せいぜい婚約を破棄して修道院に送られるだけだと思つていた。
まさか死を迫られるなんて。

「殿下……」

それを力なく受け取るとぼんやりとクリフトンを見上げた。

「マリオン。これを飲め」

彼は私に死んでほしいの？

それほど憎まれていたなんて……もう、どうなつてもいい。

マリオンは毒の入つた小瓶の蓋を開けるとそのまま飲み干した。甘い……毒は苦いものだと思つ
ていたが、さすが王家の秘毒だ。そんなことを考える自分が可笑しくて心の中で嗤つた。
ありがたいことに苦しさは感じない。

ただし目が回つて床に倒れた。目を開くと薄汚れた天井が見える。
マリオンはゆっくりと目を閉じた。瞳から涙が零れ落ちる。

自分がなぜ泣いているのかわからない。悔しいのか悲しいのか、でもすぐに全部終わる。
意識が消える直前、淡い想いを抱き続けた愛しい人の顔が浮かんだ。

(コンラッド。どうかあなたは幸せになつて……)

そのまま意識を失つた。

シンシアの前世、マリオンの人生はこうして終わつた。



シンシアが身支度を整え朝食を摂るために食堂へ向かうと、そこにはすでに家族が揃つていた。一瞬、泣きたくなるような気持ちになつた。

ああ、これはマリオンの感情だ。彼女はずつと『家族が笑顔でごす光景』に憧れていた。運命が狂わなければコンラッドと築けたかもしれなかつたもの。

「おはようございます！ 姉上」

十歳になる可愛い弟ルイスがシンシアの顔を見るなり満面の笑顔で挨拶をしてくれた。子供特有の高い声は元気いっぱいだ。その声にシンシアは我に返り微笑んだ。

ルイスの顔を見ただけで前世の苦しい記憶があつという間に浄化される！
すごいパワーね。

「おはよう、ルイス。お父様、お母様、おはようございます」

「おはよう、シンシア」

「おはよう。今朝はお寝坊かしら？ 珍しいわね」

お母様が揶揄う。

普段シンシアは目覚めがよく、多少夜更かしたくらいでは寝坊することはない。今朝は前世の記憶をつらつらと思い返していたら支度に時間がかかり遅れてしまつたのだ。

「お待たせしてごめんなさい。昨夜読んでいた小説が面白くて寝過ごしてしまつたの」「まあまあ。夜更かしはほどほどにね？」

「はい、お母様」

シンシアが席に着くとすぐに朝食が給仕される。にこやかに会話を楽しみながらパンを手に取る。今世の私は、バルフォア公爵家の娘シンシア。

そしてこの国の王太子殿下の婚約者である。

今世も公爵令嬢でさらに王太子殿下の婚約者……代り映えがしない？

いやいや、そんなことはない。全然違う。

朝からこの幸せいつぱいの光景は前世と真逆でしよう？

シンシアは柔らかいパンにたっぷりとジャムをつけて頬張る。ちよつと塩味のきいたパンと甘いジャムが最高。もぐもぐと咀嚼しながら再び前世を思い出す。

マリオンはもともとの性格もあるが環境のせいで気が弱すぎたと思う。

自分の気持ちを心に閉じ込めて、文句も言わずに王命で決められた婚約者にくして、自死を迫

られそれをあつさり受け入れる。

なんだ、それは!!

無実の罪なのに……たとえどうにもならなくともせめてそこは大声で言い返せばいいのに。
シンシアなら黙つて死んだりしない。クリフトンの頬をひっぱたいて牢から逃げる。

それが無理なら毒の瓶を開けて中身をクリフトンにぶちまけてやる！

その状況を想像しながら勢いよくサラダを頬張り、オレンジジュースを飲み干した。

命はとても大切なのよ。簡単に諦めては駄目。足搔いて欲しかった。

王太子が横暴な行動を取っている以上、拒否しても無理矢理毒を飲まされる可能性は高い。運よく生きていたとしても逃れるあてもない。それでも可能性はゼロではない。

いや、無理か。マリオンには味方がいない。どうすることもできなかつた。

そもそもクリフトンは最低だ。マリオンの不貞を疑うけれど、自分だって夜会の度にマリオンを

放り出して、ライラとくつづいてダンスをしていたじゃないか。

それなら陛下を説得して初めからライラと婚約すればよかつたのに。

そうすればマリオンだってコンラッドと幸せになれた。

（まあ、終わったことを憤つたところでどうしようもないわ。無駄なエネルギーを使うのはもつた

いない。それより今の幸せを大切にしよう）

シンシアは食事を進めながら家族の顔をゆっくりと眺めた。

シンシアの父ルーベン・バルフォアはこの国の宰相さいじょうをしている。常に多忙だが極限まで仕事を調

整して家族との時間を大切にする、家族想いの自慢のお父様。

金髪碧眼で整つた顔の父は昔から女性に人気があり、現在も秋波しゅうはを送られるほど。

でもそんなものに見向きもせず、妻への愛を貫いている。

母メイジー・バルフォアは明るいブラウンの髪に同じ色の瞳を持つ。

若いときは『美人まであと一步令嬢』と誉めているのだから貶しているのだからわからないことを言われていたらしい。ほとんどが父を好いていた女性の嫉妬しつとからくる言葉だったと聞いている。

現在は公爵夫人としての気品と振る舞いがくだらない戯言ふっしゃんを払拭ふっしょくしているので、文句を言う人はいない。まあ、いてもお父様が黙らせると思う。

シンシアから見たお母様は清楚で落ち着いていて、とても素敵な女性だ。

自分の目指す姿もある。

ちなみにシンシアの容貌ようぼうはお母様にそつくりなので、一部の貴族令嬢から同じ表現を使われることがある。でも気に病んだことはない。

美人まであと一步前に出れば美人ということだもの。すなわち私がその気になればいつだって美人になれちゃうということね！ と前向きに受け止めた。

その考え方ができるようになったのは、あることがきっかけだった。

幼い頃、同じ歳頃の令嬢に「シンシアちゃんの髪は茶色でつまんないね」と言われ泣いたことがある。その子はキラキラと輝く金髪だった。

シンシアは大好きなお母様と一緒に色で嬉しかったのに否定されて悲しかつた。その話を聞いた

お父様は一瞬だけ青筋を立てたが、すぐに優しい笑みを浮かべた。

「シンシアの色はお母様と一緒にでとびきり素敵なお色だよ。甘い紅茶と同じ色だろう? お父様は見ているだけで幸せになる。他の人は気付いていないから、これは家族の秘密だ」

小さなシンシアは紅茶を飲むときにいつもお砂糖をたっぷり入れていたから、わかりやすくてえてくれたのだろう。

「わたしのちゃいろいかみは、おとうさまをしあわせにしているの?」

「そうだよ」

「うれしい! ジヤア、もう、かなしくない」

シンシアは両親から否定的な言葉を言われたことがなかつた。

些細なことでも成し遂げると大袈裟なほど誉めてくれて、さらにはお祝いをしてくれる。

おかげでシンシアは、自分自身の存在に自信を持つてゐる。

「シンシア、すごいぞ! もう字が読めるのか!!」

「まあ、シンシア、絵が上手ね」

「天才だ! 画家になれるぞ」

「シンシアは笑つてゐるだけでいい、無理に勉強をしなくていいぞ」

「メイジー、シンシアのカーテシーが完璧だ。今日は祝うぞ!」

五歳児のカーテシーが完璧なはずがない。お父様は何かにつけてシンシアを誉める。

基本的にはかなりの親ばかだし、シンシアが増長していれば我儘令嬢になつていたかも知れない。

でもいけないことをすればしつかりと叱られたし、何よりも貴族然とした両親の姿を見ていれば意外と道を踏み外さずにするものだ。

愛情あつてこそだと思う。ああ、家族大好き!

前世のマリオンは内気で自信がない女性だったが、容貌でいえばシンシアよりもはるかに美人だった。燃えるような真っ赤な髪にエメラルドグリーンの大きな瞳は宝石のように美しい。優げな雰囲気を纏い庇護欲をそそられる。

でも誉めてくれる人がないので、その魅力に気付いていなかつた。

抱きしめてくれる家族もなく、コンラッドと出会うまでは食事はいつも一人だつた。

感覚が麻痺して、寂しい境遇にいる自覚もなかつたように思う。

前世の両親は愛人家族と幸せな団欒を囲つてゐたのかな。

想像するとマリオンが憐れで胸が締めつけられる。

(マリオン。今世ではあなたの分まで私が幸せになるから、任せてちょうどいい!)

シンシアには弟がいるが、もしもマリオンにも仲のいい兄妹がいれば違う生活があつただろう。そんなことをルイスを見ながらふと考へた。

弟のルイスは十歳年下、父そつくりの美形で将来が楽しみだ。

食事が終わるとルイスが目を輝かせてシンシアを見てゐる。

「ルイス。どうしたの?」

「姉上。あの、お勉強を見てもらつてもいいですか?」

もじもじとおねだりする姿が可愛い！

「もちろんいいけれど、ルイスは勉強しすぎではないかしら？ 遊ぶことも大切よ」

ルイスは公爵家を継ぐための勉強をしている。両親は家庭教師と相談して年齢に合わせて進めて

いるが、ルイスが前のめりで頑張っているのだ。

まだ子供なのだから焦らないでほしいと心配している。「でも、僕は早く大人になつて姉上が王妃様になつたときに、臣下として支えられるようになります！」

シンシアは胸をぐつと手で抑えた。

弟が！ 尊い！ 姉想いで素晴らしいすぎる。シンシアは外に飛び出して「私の弟、可愛いでしょう！」と叫んで世界中に自慢したい気持ちになった。

両親や使用人たちはそんなシンシアとルイスのやり取りを微笑ましそうに見ている。

その後ルイスの部屋に移動して勉強を見るも、弟の賢さに感心するばかり。同じ歳のシンシアはここまで理解していなかつたように思う。そう誓めるルイスは嬉しそうに笑った。

（私はルイスにとつて誇れる姉でありたい）

密かに決意していると侍女が来訪者の存在を告げに来た。

「王太子殿下がお見えになつております」

「ブラッドが？ 今日は約束をしていなかつたはずよ？」

「きっと義兄上は、姉上に会いたくて我慢できなかつたのですよ！」

ルイスは教科書を閉じると部屋をバタバタと出て、玄関までブラッドを出迎えに行つた。

ブラッド・オールディスは我が国の王太子でありシンシアの婚約者である。二人は一ヶ月後に婚姻を結ぶ。周辺国から要人を招待して大々的な披露宴を挙げるのだが準備はすでに万全だ。

ルイスに急かすように手を引かれ、ブラッドが部屋に來た。

「シンシア。急にすまない。どうしても顔を見たくなつて」

ちつともすまなそうではない顔でシンシアを熱く見つめている。いつものことながら照れてしまふ。その気持ちを誤魔化すとお説教口調でやんわりと窘めた。

「ブラッド、私たち昨日も会つてゐるわよ？」

「一日でも顔が見えないと、私はシンシア不足になつてしまふ」「もう！」

ブラッドは至つて眞面目な顔で告げるが、シンシアは恥ずかしくなり耳まで真っ赤になつた。

ブラッドは紺碧色の髪と瞳を持つてゐる。王族だけが持つ色だ。

その深く濃い鮮やかな青は、いつだつてシンシアを魅了する。

スラリとした体躯は細身に見えて日々の鍛錬で鍛えられている。時々ルイスに剣の指南をしてくられることがあるのだ。

ちなみに、ルイスは彼のことをすでに「義兄上」と呼んでゐる。ある日ブラッドを「義兄上」と呼んでしまつたのがきっかけだ。

私たちはまだ結婚していないし、幼いとはいへ王太子殿下に對して不敬かと焦つたのだが……

ラツドは感激して喜んでいたので、そのまま「義兄上」と呼んでいる。

「義兄上。あとで僕に剣を教えてくださいね！」

「あ、いいとも」

ブラツドがルイスの頭を優しく撫でる。

美しい光景に、ほうっと感嘆の溜息が出てしまう。

ルイスは気を利かせたようでシンシアとブラツドを部屋に残して出て行つた。

「ルイスは賢いし利発でいい子だなあ。それに私を義兄上と呼んでくれるし」

当然です。我が家の中の自慢の子ですからね。

「ルイスはブラツドのことが大好きだから」

シンシアがくすりと笑うと、ブラツドが逞しい腕をシンシアの腰に回し自身の体に抱き寄せる。

シンシアはそれに逆らわずに彼の体にそつと身を預けた。

するところめかみに柔らかい感触がした。

口付けられた！

シンシアは平静を装っているが心臓はドクドクと大きな音を立てている。

ブラツドに聞こえているかもしれない。

「シンシア、愛している」

「わ、わたしも……」

さらりと告げられた愛の言葉に胸が熱くなる。

私たちには婚約者だし、もうすぐ結婚するのだからこれくらいのスキンシップは問題ない。むしろしたほうがいい……と思う、とはいえたまに慣れず緊張してしまう。

シンシアとブラツドはずつと一緒にすごしてきただが、彼が意味ありげな態度でシンシアに触れるようになつたのは一年前くらい前から。それまでは正真正銘、口付すら交わしていない（手の甲へのキスは数えないものとする）清らかな仲だった。

シンシアはブラツドを大好きだと思っていたが、性的な意味では意識していなかつたことに気付

きとても混乱した。冷静になると結婚する男性にそれではまずいのでは？ と反省した。

シンシアにとつてブラツドは自分を守ってくれる世界一安全な男性という認識が強く、手を繋いでもダンスを踊つても安心感と楽しいが勝つてドキドキしていなかつた。

（意識した途端にときめいちやうなんて、無意識でもずっと男性としてブラツドが好きだつた証拠だと思う）

もうすぐ二人は夫婦になる。

きっとブラツドは鈍感なシンシアが結婚してから混乱しないように、意識させようとわざと意味

ありげな行動を取るようになつたに違いない。

もちろん嫌ではない。だつてそういう意味で触れられて感じたのは喜びだつたのだから。

これからはしつかりと意識しようと決意したが、その必要はなかつた。

その日からブラツドを目の前にすると勝手に心臓が暴れ出す。

胸がきゅつとなつて、彼に触れてほしいし触れたくなる。シンシアは幸せを噛み締めた。

◇

シンシアとブラッドの出会い。

それはシンシアが産まれた翌日から始まる。

お母様と王妃様は若い頃からの親友だった。その交流はそれぞれの結婚後も続き、お母様がシンシアを出産した翌日、お祝いのために王妃様は四歳になつたばかりのブラッドを連れてバルフォア公爵邸にやつて來た。

シンシアはもちろん覚えていないが、生まれたてのシンシアはブラッドを見て笑つた。そして差し出されたブラッドの指をぎゅっと握つたと聞かされている。

それでブラッドはシンシアに運命を感じて、その場でシンシアにプロポーズをした。

お父様は即座に猛反対した。うんうん、怒つている姿が目に浮かぶわ。

お母様は反対をしなかつた。母親の勘で二人が運命だと思ったらしい。

予知能力？ お母様つてどこか達観したところがある。

王妃様は困惑していたそうだ。

ブラッドは勉強を頑張るからとお父様に頼み込み、シンシアに会いに公爵邸に通つた。だからシンシアとブラッドの歴史は長い。

——あれはシンシアが五歳になつた頃だつた。

お父様が満面の笑みを浮かべてデレデレと、シンシアに新しい絵本をプレゼントしてくれた。

「シンシア、新しい絵本だよ。お父様が読んであげよう！」

「ありがとう！ でもごほんはブラッドによんでもらうの！」

「え……」

お父様は蒼白になつて固まつたが、シンシアは気付いていない。翌日はブラッドが来る日だつたので、それまでは本を開かずに彼に読んでもらうことを楽しみにとっておくことにした。

その夜、お父様が絶望に打ちひしがれ食事も喉を通らなかつたと、大きくなつてからお母様から教えてもらつた。ごめんなさい、お父様。

お父様は、本屋でどの本ならシンシアが喜ぶかと時間をかけて探してくれて、読み聞かせるのを楽しみにしていたらしい。「さすがにお父様が可哀想になつたわ」とお母様は笑つていた。

申し訳ないとは思うがシンシアにも言い分がある。

お父様に読んでもらうと声が低くて無駄に迫力があり絵本の内容に合わずしつくりこない。まるでおどぎ話が戦記に感じるくらいに違和感があるのだ。はつきり言って怖い。

でもブラッドは声変わり前の高い声で抑揚をつけて面白く読んでくれる。ブラッドだとおどぎ話がさらにキラキラと華やいで感じる。

翌日ブラッドが屋敷に来ると、シンシアは絵本を持って駆け寄つた。